

〈共同研究報告〉

生きている劇としての能——謡曲の多角的研究

二〇〇〇年七月より二〇〇一年三月まで、ジェイ・ルービン教授を主催者として「生きている劇としての能——謡曲の多角的研究」と題する共同研究会が実施された。それに関連する成果の一部としてここに以下の三編を収録する。

◆ジェイ・ルービン「舞台の彼方へ」

◆ロイヤル・タイラー「能の機織り——『真服』と『錦木』を中心に」

◆田代慶一郎「観世元雅の『弱法師』について」

ルービン教授の寄稿は学術論文を意図して書かれたものではないが、研究会の概要を伝え、また謡曲を文学作品として、現代の視点から読み直そうとするルービン教授の立場を簡潔に表明したものである。研究会への導入、従来の国文学界での歴史的・文献学的な謡曲研究への挑発を込めたメッセージとしての位置を占めるものである。なお、ルービン教授には、本研究会立ち上げに至る経緯を述べたものとして日文研フォーラム第八二回『京の雪、能の雪』（一九

九六年）がある。併せてご一読いただけると幸いである。

タイラー教授の寄稿は、学術的エッセイという体裁をとっているが、本研究会において「特別発表」として報告されたものであり、『源氏物語』の新訳を刊行し、それ以前から謡曲の英訳者として高く評価されている同教授の、謡曲に対する読みの一端を示したものである。

最後に、田代教授による論考はこの共同研究会の学術的水準を示すものであり、その成果を是非『日本研究』に披露したい、との教授の意思により寄稿いただいたものである。

本研究会の成果報告としては、以上の他に、その一斑を別途『桂坂謡曲談義』（日文研叢書三七）として二〇〇六年三月に刊行の予定である。

なお、次頁に本研究会の開催記録を付記した。

共同研究会「生きている劇としての能」

幹事・稲賀繁美

研究会開催記録

平成一二(二〇〇〇)年度

共同研究「生きている劇としての能——謡曲の多角的研究」

(代表者 ジェイ・ルービン 幹事 稻賀繁美)

第一回 平成一二(二〇〇〇)年七月二四日(月)～二五日(火)

《高砂》《白鬚》《忠度》《兼平》

第二回 平成一二(二〇〇〇)年九月二五日(月)～二六日(火)

《井筒》《定家》《卒都婆小町》《松虫》

第三回 平成一二(二〇〇〇)年十一月二七日(月)～二八日(火)

《邯鄲》《三井寺》《山姥》《鶴》

第四回 平成一二(二〇〇〇)年一月二二日(月)～二三(火)

《経政》《弦上》《藤戸》《鞍馬天狗》

(二二日は河村能舞台にて開催)

第五回 平成一二(二〇〇〇)年三月二六日(月)～二七日(火)

《江口》《恋重荷》《弱法師》

特別発表 ロイヤル・タイラー「能の機織り——

《呉服》と《錦木》を中心に——」

モニカ・ベーター「能に出る染色関係の色々」